

VOL  
ZINE 07  
THE  
GREEK  
INSURR-  
ECTIONS

14. MAY 2010

## EUROPE AND THE BULL FRANCO BERARDI (BIFO)

# エウロペとブル フランコ・ベラルディ (ビフォ)

櫻田和也 訳・解説

EUは崩壊の縁にある。

このように多くのエコノミストは考え、ジャーナリストなかにも口にするものがある。いっぽう大陸の政治的・知的生活は苦悶のなかで、冷笑主義と人種差別主義の暗闇へと歩みを向けている。

「ユーロを基盤とするEU（ヨーロッパ通貨連合）は巨大な幻想としてはじまった」と、ヨアヒム・シュタルパティはヘラルド・トリビューン紙（2010年3月29日付の記事"Leave the Euro Zone"）にこう書いた。「一方にはオーストリア、フィンランド、ドイツ、オランダといった、その通貨がいつもヨーロッパ圏内でも世界的にも評価されてきた国々があった。他方ベルギー、フランス、ギリシア、イタリア、ポルトガル、アイルランド、スペインのように、いつも評価の低い国々があった。にもかかわらず連合は、単一で万能の構造として考案されたのだ」と。

これは小さなことだが、おわかりのとおりプロテスタント諸国が経済的評価の高い側であり、カトリックと正教会の諸国が低い側だ。

そして状況は2008年9月にはじまった金融危機によって悪化するばかりであり、終息してなどはない。

「ギリシアの危機は、ユーロの原罪に起因する震盪のただひとつではない。これを進んで言うものはほとんどないが、解決方法は明白だ。グローバル経済への危害を最小限に留めるためには、ドイツの主導でユーロ圏外の近しい安定諸国と新たなより強力な通貨ブロックを形成することだ。単一のユーロ通貨圏という考えが誤っている」。

行儀よいプロテスタント諸国は実のところユーロ圏に属することによって危険に晒されているが、しかし怠けもので信頼に足りないギリシア（および近しく次の失敗が見込まれるカトリック諸国）もまたユーロに属することでそれほど多くの利を得ているわけではない。

「こうした諸国は、高い貿易赤字に示されるとおりグローバル経済において競争力を有してはいない。ドイツはそうした諸国を助けることはしないと決め、欧州中央銀行のドグマを破算にするのではなく、むしろIMFが大陸に介入して罪深き怠けものの南部諸国を助けてやってほしいと望む。だからギリシアにとってユーロへの所属は問題を悪くするばかりなのだ。もしギリシアがユーロ圏外であったなら、たとえば、競争力を上げるために通貨を切り下げ、対外債務を国際会議の場で再交渉するなどの方法があるのだから」。

もしEUというものの疑いなき基盤であるネオリベのドグマとマネタリストのイデオロギーを認めるのなら、シュタルパティの述べる苦境の論拠を退けることは困難だ。つまり最終的な崩壊が近づいているということだ。

国を憂いたりしないものとしては「知ったことか」といいたい。

だがわたしがEUのことを思うのは、憂国の情とはなんら関係がない理由からなのだ。それは第一に、大陸を過去二百年間にわたって暴力と大量殺人の深淵に放り込んできたナショナリズムという悪疫の陰で忘れ去られかけていた企ての初の一步であるからだ。また第二にそれは、一般知性を展開させるポスト・フォーディズム時代の社会的再組成と前進の主力たるコニタリアートのために共有の土台を産み出すものだからだ。

とりわけ崩壊の目覚める今わたしがヨーロッパについて思うのは、人々は最終的にEU崩壊のせいでジレンマへの直面を強いられることになるだろうということだ。ネオリベのドグマと欧州中央銀行の金融独裁から自由になるのか、あるいは来るべきナチズムの新形態である民族内乱の地獄へと陥ることになるのか。これは二〇世紀を通じて退廃する資本主義がその実験室を見出した地であるイタリアではじめに表面化した今、ヨーロッパ全土に拡散しかねないものだ。

EUでは政治的意志や社会的文化という言葉が意味をもたず、ただ金融寡頭制の決定だけが実効的な権力なのだから、民主主義であるというにはほど遠いのである。際限なき経済成長と金融の持続へのパラノイアの強迫観念こそが連合の核だ。この数十年は社会的連帯が金融ドグマと成長への強迫観念と共存しえたのだったが、もはやそんな共存は過ぎ去った。わたしたちは選択を迫られている。ネオリベの強迫から自由になるのか、連合を崩壊させ地獄への扉をひらくのか。

古代ギリシア神話の想像において、ヨーロッパ（エウロペ）は若く美しい少女だ。この乙女を犯したいという欲望に駆り立てられた男性ホルモン過多のジュピター（ゼウス）は牡牛に変装して地上へと下りた。だが娘は逃げようとして地中海を離れ、冷たいが寛容な北の方へと向かった。

それ以来、金融の牡牛がヨーロッパ戯曲の主役をつとめてきたのだった。エウロペと名付けられた美しい娘、すなわち社会的連帯と知的自由とはかろうじて地下の社会的諸運動に育まれ隠れて生きのびることが許されてきたのだ。もはや終わりの時が来た。いまこそわたしたちは牡牛に立ち向かい、欧州中央銀行の金融独裁を公に批判せねばならない。いまこそわたしたちはドグマと貪欲の暗闇からコニタリアートの社会的創造力を解放することを呼びかけなければならない。いまこそわたしたちはベーシックインカムのための、労働時間の全般的縮減のための政治的運動を立ち上げねばならない。

(2010・4・11)

### 解説

マリオ・トロンティが『労働者と資本』で示して以来、労働者の運動が資本に先行するというオペライズモ的な階級組成の見方をとるフランコ・ベラルディ（ビフォ）は、労働力移動あるいは大衆の蜂起といった形態に表出される人々の運動を、しかし根底的には（ガタリのいう）欲望＝機械の運動であるとさらに深く読み込む。

それゆえここに訳出した手紙はただの経済評論ではなく、EU憲法の批准をめぐる経済ネオリベ化を推進するものでしかないと思われた人々が「ノン」といい、それをわかったうえでなおネグリが「ウイ」と主張した双方の根拠、EUそのものの両義性をよくとらえているのである。

4月上旬の時点で5月のゼネストを予見しえたかれの目は、隣人の生活空間のうちに2001年通貨危機以降のアルゼンチンにも匹敵する社会的実験の可能性をたしかに見つめていた。だからベーシックインカム＝労働時間の全般的縮減ということばの意味を、自らの狹隘な想像力のうちに留めてはならない。つまり、それを目的と混同してはならない。

財源や資力調査云々は問題の矮小化である。無条件性という理念を字義どおりにうけとめるならば、各人の必要でさえあればこのだれがいくらもらっても良いものでなければならない。もらいうる個人がいかなる属性によっても分別されてはならない。だれも不正受給を疑われることがあってはならない。したがって顔面は問題ではない。無条件であるとは即ち無制限なのでなければならない。

心配はいらない。実のところわたしたち各人のニーズ総量はそれほど莫大なものではないからだ。それは資本家たちがようやく「若者たちの消費の減退」を嘆きはじめたとおりである。このつつましいわたしたちが自律的な社会をつくるための手段ににぎること、かれはそれが現在の政治的運動であるというのだ。

## WHAT DO WE HONESTLY HAVE TO SAY ABOUT WEDNESDAY'S EVENTS?

### 声明

## 水曜日の出来事についてわたしたちが正直に言わねばならないことは何か？

実際のところ、水曜日（5月5日）の出来事は、アナーキスト／反権威主義者の運動にとって、何を意味しているのだろうか？ 三人の死に直面して、だれがかれらを死なせたのかを考えることなく、立場を決めることはできない。わたしたちは闘争において、人間として、人民として、どのような立場に立っているのだろうか？ わたしたちは（警察や国家の残虐性による）「一度だけの出来事」として、今回の事があったとは認めない。国家と資本主義システムによる暴力は、日常的に存在している。わたしたちには、物事を名指す勇気がある。交番で移民を拷問している者たちをあばき、豪華なオフィスやテレビ局の中からわたしたちの生をもてあそんでいる者たちをあばく。では、わたしたちがいま言わなければならないことは何なのか？

銀行労働者組合 (OTOE) が出した声明や、支店の従業員たちによる告発の裏に隠れることはできる。あるいは、亡くなった人たちが防火装置のない建物にとどまるよう強制され、鍵までかけられていたという事実にとどまることもできる。卑劣なのは銀行のオーナーであるブゲノプーロスだということにとどまることもできるし、この悲劇的な事件が、前例のない弾圧を野放しにするためにいかに使われるのか [を問うこと] にとどまることもできる。これは水曜日の夜にエクサルヒアを（勇気をもって）通った者なら、誰もがすでにはっきりと理解していることだ。しかし、問題の所在はそこにはない。

問題は、わたしたちの誰もが責任の一端を負っていると認めることである。わたしたち全員が共同責任をもつのだ。不当な法案の押しつけに対して、すべての力もちいて闘うのは当然のことだ。わたしたちの強さと創造力をよりよい世界のためにささげること当然のことだ。しかし、政治的な存在として、わたしたちは、わたしたち全ての政治的選択について、行使してきた手段について、自分たちの弱さや誤りを認めないたびに沈黙してきたことについても、等しく責任をもっている。わたしたちは、票を稼ぐために人民におべっかを使うことはない。誰を搾取することにも興味はなく、こうした悲劇的な状況においても、わたしたち自身と、わたしたちの周りにいる人々に対して正直であることができるのだ。

現在、ギリシアのアナーキスト運動は、完全に麻痺状態におちいつている。というのも、強硬な自己批判の圧力が高まっていて、アナーキストたちを痛めつけようとしているからだ。「私たちの側」、つまり労働者の側にいた人々——きわめて困難な条件におかれていたが、職場の環境が異なっていれば、私たちの側で歩くことを間違いなく選んだであろう労働者たち——が死んだという惨事をこえて、わたしたちは人々の命を危険にさらすようなデモ参加者（たち）にも直面している。たとえそこには殺意がなかったとしても（それについて疑う余地はない）、そこに事態の本質があり、目的の設定と手段の選択についての議論を含む、多くの議論がなされるだろう。

事件が起こったのは夜でも、サボタージュの最中でもなかった。事件は、現代ギリシアの歴史においてももっとも大規模なデモの間に起こった。そしてここに、一連の困難な疑問が生じている。概して言えばこうだ。近年例を見ないような15万～20万人のデモに、「アップグレードされた」暴力は本当に必要とされているのだろうか？ 数千人が「燃やせ、国会を燃やせ」と叫び、

警察を罵っているとき、もうひとつ銀行が燃やされたとして、それはなにか運動に寄与するところが本当にあるのだろうか？

2008年12月のように、運動自体が大規模になっているとき、ある行動が（少なくともその時点で）社会がもつ限界をこえている場合、あるいは、人の命を危険にさらす場合、その行動は、何を与えることができるのだろうか？

路上に出るとき、わたしたちは周りの人々と共にある。かれらのとなりにいて、近くにいて、共にいる。これがつまるところ、わたしたちが一日の終わりに、忙しくテキストやポスターをつくる理由である。そしてわたしたちの諸箇条は、ここに集合した大多数の中の唯一の方向性なのだ。暴力について率直に語り、この数年の間にギリシアで発達してきたある種の暴力の文化を批判的に検討する時がきた。わたしたちの運動は強くなってこなかった。それは、時に用いたダイナミックな手段のためではなく、その政治的な筋節のためである。2008年12月が歴史的なものとなったのは、ただ数千人が石と火炎瓶を手にして投げたからではない。主要には、その政治的社会的な特質によるものであり、そのレベルで残された豊かな遺産によるものなのだ。もちろん、ふるわれた暴力には応答する。しかし今度は、わたしたちの政治的選択だけでなく、行使してきた手段について話すことが求められている。わたしたちとかれらの限界を認識しながらだ。

自由について話すことは、昨日には当然だと思っていたことを、つねに疑うということだ。月並みな政治用語を避けて、勇気をもって徹底的に疑い、物事があるがままに見えろということだ。わたしたちが暴力それ自体を目的と考えていないことは、はっきりしている。ゆえに、暴力がわたしたちの行動の政治的次元に影を落とすことを許すべきではない。わたしたちは殺人者でなければ、聖者でもない。わたしたちは弱さや過ちも含めて、社会運動の一部分である。現在、あれほど巨大なデモの後に、わたしたちはより強くなったと感じるのではなく、控えめに言っても、麻痺してしまっている。このこと自体が、多くを語っている。わたしたちは、この悲劇的な経験から自己を省察し、互いを勇気づけなければならない。結局のところ、わたしたちは自己意識にもとづいて行動するのだから。つまり賭けられているのは、そうした集合的な意識を育てていくことなのである。

(2010・5・7)

<http://www.occupiedlondon.org/blog/2010/05/07/what-do-we-honestly-have-to-say-about-wednesdays-events/> より

## THE MURDERERS "MOURN" THEIR VICTIMS

### 声明

## 殺人者たちはじぶんがだした犠牲者に

## 「追悼の意を表明」している

本日5月5日に行われた、大規模なストライキの示威行進は、怒りの社会的な表出となった。ギリシアのあらゆる世代から、少なくとも20万人が路上に立ち（雇用者も非雇用者も、公共部門であれ民間部門であれ、地元民であれ移民労働者であれ）、数時間以上続いた人波をおして、国会を包囲し、占拠しようとした。鎮圧軍がおなじみの役目ははたそうとやってきた——政治的・財政的権威を護ろうとしにきたわけである。衝突は数時間つづき、拡がっていった。政治システムとその制度はどろろに落ちた。しかし、こうしたことすべてのなかで、言葉では言いあわせない、ある悲劇的な出来事が起きた。燃えあがるスタディウ通りの

マーフィン銀行支店からの出火によって、三名が亡くなったのである。

国家および全ジャーナリストのクスどもは、この死およびじぶんたちの側近になんら恥じ入ることなく、最初から「フードで顔を隠した殺人者の若者たち」について語り、この出来事を利用して、爆発した社会的な怒りの波を鎮め、ずたずたにされたじぶんたちの権威をとりもどそうとした。警察によるストリート占拠を再び課し、国家テロリズムと資本主義の蛮行に対する社会的抵抗と不服従の源を一掃しようとしたのである。以上の理由から、つい先ほどまでの数時間、警察部隊はアテネ中心地区をのし歩いていたのであり、かれらは数百名を拘留し、そして——銃器と手榴弾をもって——、アナキストに占拠されて、広範なダメージを権力に対してひきおこしていた、ザイミ通りの「スペース・オブ・ユナイテッド・マルチフォーム・アクション」とツマドウ通りの「移民労働者の家」の手入れをおこなったのである（いずれもアテネのエクサルヒア近郊の場所）。これと同時に警察による暴力的な立ち退き命令が、まもなくおこなわれるだろう「殺人者たち」の逮捕にもけた手入れに言及した首相の発言後、その他の自己組織空間（占領と居留）を苦しめている。

政府、政府公式見解、その要人、テレビ代弁機関、労賃をあくせく稼ぐライターたちは、このようにして、じぶんたちの体制の純潔を維持し、アナキストおよび格闘するすべての後盾なき声を犯罪者扱いしようとしている。まるで、銀行を襲撃した者なら誰でも建物の内部に人がいたのを知ることができ（公式のシナリオという支えを与えられて）、にもかかわらずかれらが建物に火をつけるチャンスがほんのわずかでもあったかのように、である。かれらは人民の格闘を人民じしんに向けさせ、混乱させようとしているかにみえる。なんのためらいもなく社会全体を最も深い掠奪と奴隷化に引き渡し、じぶんたちの行政高官にためらうことなく攻撃し、射殺するよう命令をくだし、この三名が財政上の負債のせいで先週自殺したにすぎないことにしようとしているかにみえる。

ほんどうの殺人者、今日起きた三名の悲劇的死亡のほんどうの扇動者は、おなじみの雇用者による恐喝（解雇するぞという脅迫）を用い、ストライキの日にも彼の銀行支店で働くこと——ストの示威行進が通過したスタディウ通りにあった支店でさえも——を被雇用者に強いた、「ミスター」・ブゲノブーロスである。かかる恫喝は、日常のレヴェルにおいて、労賃を得る奴隷というテロリズムを味わっている者たちへのみ、きわめてよく知られている。ブゲノブーロスの要求が、犠牲者たちの遺族に対して、そして社会全体に対してなにを申しでようとするのかを、われわれはみまもっている——この超資本主義者は、いまや権力中枢のいくつかから、未来の「国家統一機関」における次期首相の座をちらつかせられており、この「国家統一機関」につづいて政治システムが完璧に崩壊することは想像にかたくない。

予期せざるストライキが、はたして殺人者となりうるなら……

おもいがけない示威行進が、おもいがけぬ危機のさなか、殺人者になりうるなら……

生き生きとした公共の開かれた社会的な空間が、殺人者となりうるなら……

殺人者を逮捕するという口実の下、国家が夜間外出禁止令を下し、示威行進者たちを攻撃しうるなら……

ブゲノブーロスがじぶんの被雇用者たちを銀行——つまりは示威行進者たちにとっての一級の社会的敵であり標的である銀行の中に、拘留させうるなら……

……それは権威のゆえにであり、この連続殺人犯は、その生まれからして、社会に対するますます厳しくなる攻撃への、資本によってますます広範囲におよびつづける掠奪への、われわれの血を吸うことへのますます高まる渴望への、権威によって想定された解決を問いただす蜂起の大量殺戮を欲している。

……それは蜂起の先に開かれる未来には、政治家、ボス、警察、マス・メディアが含まれていないからである。

……それはかれらの大いに宣伝広告された「唯一の」解決の背後に、発展指数や非雇用について語るのではなく、むしろ、連帯、自己組織、人間関係について語る、ひとつの解決がひそんでいるからである。

生、自由、尊厳を殺しているのはだれかと訊ねられたら、権威と資本の大騒動である、と答えよう。それらおよびその腰巾着である狩猟者たちに必要なことは、わが身をふりかえることだけである。今日も、そして次の日もずっと。

自由な社会空間を手放せ

殺人者、テロリスト、犯罪者であるのは国家そして資本主義者たちである

みんな、通りへでよう  
蜂起せよ

スカラマンガおよびパーティションのアナキスト・スクワット（アテネ）

(2010・5・5)

<http://www.occupiedlondon.org/blog/2010/05/06/280-statement-by-the-skaramanga-squat-in-athens-regarding-todays-events-the-murderers-mourn-their-victims/> より

## AN OPEN LETTER TO STUDENTS BY WORKERS IN ATHENS

### アピール

# アテネの労働者から学生たちへ

自分たちだけで孤立しないでほしい。われわれに電話してほしい。できるだけ多くの人たちとコンタクトをとること。どうしたらそれが可能か、われわれにはわからないが、何とか方法を考えられるだろう。君たちはすでにいくつもの学校を占拠している。君たちによると、その最も重要な理由は、学校が好きでないということだ。それは良いことだ。君たちが占拠したことが、それらの役割を変えている。君たちの占拠行動を、他の人々と共有してほしい。君たちの学校を、われわれの新しい関係を育む場所にしよう。彼らの最も強力な武器は、われわれを分断することだ。君たちが彼らの警察署を攻撃することを恐れないのは、君たちが一緒だからであるように、われわれ皆の生活を変えるために、われわれにコンタクトをとるのを恐れないでほしい。

どのような政治的組織（アナキストであろうと何だろうと）の言う事も聞かないでほしい。抽象的な図式や理念でなく、人々を信じてほしい。君たちの人々との直接的な関係を信じてほしい。君たちの友人たちを信じてもらいたい。君たちの闘争によって、できるだけ多くの人々を君たちの民衆にしてほしい。君たちの闘争には政治的内容がないので、それを獲得すべきだなどという声には、耳を傾けないでほしい。君たちの闘争こそがその内容なのだ。君たちが持っているのは、君たちの闘争のみであり、その発展を司るのは君たちの手しかない。君たちの生を変革するのは、君たちの闘争——言い換えると、君たちと君たちの仲間の間の現実的な関係——だけなのだ。

新しい事象に出会った時に、さらに突き進むのを恐れないでほしい。年をとるにつれて、われわれそれぞれの頭の中には、いろいろなことが植えつけられている。君たちは若いが、やはりそれなりに植えつけられている。この事実の重要性を忘れないでほしい。かつて1991年には、われわれは新しい世界の香りに出会った。その時、ほんどうに困難を感じたわけだ。われわれは常に限界というものがあることを学んだ。商品の破壊を恐れないでほしい。人々が商店を略奪するのを恐れないでほしい。われわれがこれら全てを引き起こしているのだ。彼らはわれわれなのだ。君たち——つまり過去のわれわれ——は、朝起きて、いずれ君たちのものではなくなるものを作るように育てられている。それら全てを取り戻し、皆と分かちあおう！ まさにわれわれが友人たちと愛を分かち合っている様に。

(2008・12・17)

**ギリシャ蜂起2010・5・5**

GREEK RIOTS

**エウロペとブル**

EUROPE AND THE BULL

**フランコ・ベラルディ(ピフォ) (訳・解説 櫻田和也)**

FRANCO BERARDI(BIFO)

**声明** 水曜日の出来事についてわたしたちが正直に  
言わねばならないことは何か?

WHAT DO WE HONESTLY HAVE TO SAY  
ABOUT WEDNESDAY'S EVENTS?

**声明** 殺人者たちはじぶんがだした犠牲者に  
「追悼の意を表明」している

THE BURNERS "MOURN" THEIR VICTIMS

**アピール** アテネの労働者から学生たちへ

AN OPEN LETTER TO STUDENTS BY WORKERS IN ATHENS

**編集注記**

「エウロペとブル」は4月11日、フランコ・ベラルディ(ピフォ)から友人たちに送られた書簡である。これはその一月後のギリシアの事態を預言したものであるばかりでなく、その本質と未来をも示している。私たちはVOL eXtraとして刊行した「金融恐慌から commonsへ」で2008年の恐慌が最終的な危機のはじまりであること、そしてVOL 4号でそれに対する新たな闘争が組織化されつつあることを確認した。その上で、この「預言」を多くの友人たちと共有しなければならなかった。

これにあわせて彼の地より届いた声明をふたつ訳出した。ともに今回の事態を考察するための重要な視点を提起するものである。

さらにVOL 4号に掲載した2008年秋のアピールを転載する。このアピールの背景、また今回の蜂起をより理解しようとする読者には同誌4号の「蜂起」のセクションを参照されたい。

ギリシアの事態は資本主義の最終局面への序曲である。これを私たちの未来のはじまりとするためにあらゆる試行を! このzineはそのささやかな一歩である。